

音楽科の思考力を高めるパフォーマンス課題の開発 —「能の謡のリズム」を中心として—

地域教育支援部 研究主事兼指導主事 浅井 ちとせ

要約

平成29年に中学校学習指導要領、平成30年に高等学校学習指導要領がそれぞれ告示された。教育課程で音楽を学ぶ意義として教科及び科目の目標に「生活や社会の中の音（芸術科音楽Ⅲ：多様な音）や音楽、音楽文化と豊かに（芸術科音楽Ⅰ：幅広く/音楽Ⅱ、Ⅲ：深く）関わる資質・能力の育成」と明記された。この資質・能力の育成のため、音楽科授業におけるパフォーマンス課題を当センター講座で示したいと考え、従前に続く同テーマを提示しながら、副題を「—『能の謡のリズム』を中心として—」として設定した。本年度は中高音楽「能の節を謡ってみよう&タブレットでお囃子を創ろう」講座を策定し、謡の実技及び音楽創作アプリケーションを活用した囃子音楽の創作実技を実施した。その際、音楽授業への活用意欲を調査するため受講報告書に加えて、Formsアンケートを実施して本講座の成果と課題を見出し、次年度の講座内容に反映することとした。さらに中学校及び高等学校の生徒の能を含む我が国の伝統音楽への興味・関心の基礎となる小学校音楽科で身に付ける資質・能力も提示したいと考えた。

キーワード：学習指導要領音楽科の目標が示す資質・能力の具現化

能の謡及び音楽創作アプリケーションを用いた囃子の創作

音楽科授業への活用意欲

1 研究の背景

中学校学習指導要領音楽編及び高等学校学習指導要領芸術編音楽Ⅰ～Ⅲの各目標に示された「生活や社会の中の音（芸術音楽Ⅲ：多様な音）や音楽、音楽文化と豊かに（音楽Ⅰ：幅広く、音楽Ⅱ・Ⅲ：深く）関わる資質・能力の育成」を具現化するため「音楽科の思考力を高めるパフォーマンス課題の開発」をテーマに令和2年度から研究を続けている。

(1) 学習指導要領より

教育課程で音楽を学ぶ意義について、中学校学習指導要領音楽編では「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成」、高等学校芸術科音楽Ⅰでは「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる資質・能力の育成」と各目標に示されている。この資質・能力について、中学校学習指導要領解説音楽編で次のように示されている。

生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成することは、生徒がその後の人生において、音や音楽、音楽文化と主体的に関わり、心豊かな生活を営むことにつながる。生活や社会の中の音や音楽、音楽文化との関わり方には、歌う、楽器を演奏する、音楽をつくる、聴くなど様々な形があるが、そのいずれもが音や音楽、音楽文化を知り、支えることとなり、生活の中の音や音楽の働きを自覚し、音楽文化を継承、発展、創造することにつながる。（中略）また、グローバル化が益々進展するこれからの時代を生きる子供たちが、音楽を、人々の営みと共に生まれ、発展し、継承されてきた文化として捉え、我が国の音楽に愛着をもったり、我が国及び世界の様々な音楽文化を尊重したりできるようになることも大切である。

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編（p.11～12）

上記に示されているように、音楽を学習することが音楽文化を継承、発展、創造する資質・能力を育み、我が国の音楽に愛着をもったり我が国及び世界の様々な音楽文化を尊重したりできる資質・能力につながると考え、本研究においても我が国の伝統音楽を教材としてパフォーマンス課題を作成することとした。

（2）本テーマ及び副題設定の経過

令和2年4月、コロナ禍により多くの学校が休校となった。年度当初、在宅での学習が増えることを想定し、身の回りの生活や地域の自然・文化を素材とした音楽創作を学習課題とし、学校再開時に雅楽、箏や尺八音楽等の鑑賞授業につなげることを考え、当センター講座で創作と鑑賞を往還するパフォーマンス課題を前述の資質・能力を育成する具体として示すため、本テーマを設定した。

令和2年度は、当センター講座「中高で深める『和を奏でよう&みやびな音楽を創ろう』」講座を実施した。箏曲「六段の調」の奏法を和歌のイメージ創作に生かす課題を提案し、講座後に受講者の勤務校の研究授業（中学校1年の「A市百人一首」を素材とした箏曲創作）を参観して、講座の成果及び課題としてまとめた。

令和3年度は、副題を「一我が国の伝統音楽とICTをつなぐ創作課題一」と設定し、当センター講座「一本の弦から奏でる箏の基礎」を実施した。講座では表現と鑑賞の関連を図った題材をICT活用例を含めて示し、「押し手」や「引き色」「トレモロ」等、一本の弦を使った箏の奏法を使って古典文学の一場面を表す創作実技を実施し、受講報告書等によって成果と課題をまとめ、令和4年度センター講座「箏を奏でよう×タブレットで箏変奏曲を創ろう」の策定・実施につなげた。

令和4年度は、令和3年度の中学校教科書改訂での能の教材の変更（教育芸術社：「羽衣」から「敦盛」）によって、能「敦盛」の指導方法に関する研修ニーズがあり、新たに「『我が国の伝統音楽』の指導と評価の一体化講座～能楽『敦盛』を教材として～」講座を策定し、観世流の講師による謡の実技及びペアでの授業デザイン演習を実施した。

本年度は、令和4年度の上記講座の受講報告書に、謡の実技でのリズムの面白さの

気付きに関する記述が多かったため、謡の実技の他にタブレット端末での囃子創作によるリズム感受をねらって本副題「『能の謡のリズム』を中心として」を設定することとした。

2 能における謡及びの囃子

(1) 謡（うたい）

邦楽百科事典では、以下のように記述されている。

謡：能の声楽部分。旋律的な部分だけでなくセリフの部分も含む。演能のさいにうたわれるほかに演能から独立して演奏・鑑賞される。

【演奏形式】演能における謡は、シテやワキなどの登場人物と、それとはまったく別の地謡（じうたい）といわれる人たちとによってうたわれる。

【音楽】

（一）発声・発音：発声や息づかいは、謡の重要な表現技巧法として古くから工夫されてきた。世阿弥も＜横（おう）・堅（しゅ）の声＞（太く強い声と細くやわらかい声）、＜祝言（しゅうげん）・望憶（ぼうおく）の声＞（強く明るい声とやわらかく優しい声）など発声の型や声柄について詳しく教示しており、その内容は現在でも実践されている。また、ツヨ吟ヨワ吟二種の音組織は、祝言・望憶の二つの発声の違いから生じたと考えられている。

（二）音階・旋律：謡はコトバとフシの二部分からなっている。コトバはセリフに相当する部分であるが、様式的な抑揚をもって唱えられ、これも＜謡う＞という。

フシは、詞章の内容を問わず、一定の音階や旋律型にのっとりた部分全部をさす。

（三）リズム：謡のリズムには拍子不合（ひょうしあわず）と拍子合（ひょうしあい）の二つの型がある。拍子不合は、拍の規定がなく自由な伸縮でうたわれる部分である。拍子合は、詞章と拍との関係が、地拍子といわれる法則によって規定されている部分で、謡と打楽器とは共通の拍をきぎむ。拍子合には平ノリ・中ノリ・大ノリの三種のノリがある。最も基本的なノリは平ノリで、拍子合の謡の大部分がこれである。いずれのノリ型も八拍を基本単位とし、この八拍のうちに、平ノリは七五型十二文字、中ノリは八八型十六文字、大ノリは四四型八文字を割り当てる（基本形）。その割当の法則が地拍子である。

邦楽百科事典（音楽之友社1980）p. 94～95より抜粋して引用

(2) 囃子（はやし）

囃子及び能楽囃子について、邦楽百科事典では以下のように記述されている。

囃子：語源は＜栄やす＞。掛け声をかけたり楽器を奏することでのぎやかな雰囲気をつくり、相手を引きたてて栄える状態にすること。

能楽囃子：能および狂言の囃子。笛（能管）・小鼓・大鼓・太鼓各一人ずつで編成され、これを四拍子という。謡の伴奏のほか、役者の登退場と舞の音楽も担当する。

打楽器は、大鼓、小鼓と太鼓に分けられる。三者とも手組と呼ばれるリズム・パタン

を積み重ねることによって囃子を構成している。手組は粒¹（つぶ）と掛声を八拍子（やつびょうし）中に配列したもので、大鼓、小鼓の手組はリズム的に補助関係にある。

¹粒：打楽器の打音を「粒」という。

邦楽百科事典（音楽之友社1980）p. 827及びp. 794より抜粋して引用

3 中学校音楽科教科書2社の能「敦盛」と「羽衣」の取扱い

本講座では、中学校音楽科の教科書2社（教育芸術社、教育出版社）に掲載されている能「敦盛」（教育芸術社）及び「羽衣」（教育出版）の両演目の謡を扱った。両教科書ともに、謡の詞章の抑揚を旋律で示された譜が示されている。囃子について教育出版は、詞章と共に打楽器及び掛け声が入った囃子パート譜があるが、教育芸術社は詞章に伴う囃子パート譜の記載がなく、「中の舞」の囃子譜が大鼓、小鼓、笛の縦譜で示されている。以下に各教科書の謡及び囃子の説明部分を示した。

①教育芸術社「中学生の音楽2・3下」 能「敦盛」、謡「敦盛」

- ・能の詞章（文章）は、室町時代に使われていた言葉で書かれており、「謡」によって表現されます。
- ・地謡：シテの演技に合わせて、シテにまつわる物語やその心情、情景を描写した謡を謡います。通常8人で編成され、リーダー役の「地頭」は後列中央に座ります。
- ・囃子：能の囃子は、笛（能管）、小鼓、大鼓、太鼓で編成され、この4つの楽器を合わせて「四拍子」ともいいます。太鼓は主に神や鬼など、人間ではない役が活躍する場面で用いられます。

ポイント1 いろいろな謡い方 謡には「コトバ」の部分と、「フシ（旋律）」を付けて謡う部分があります。「コトバ」は登場人物のセリフにあたり、一定の抑揚を付けて謡います。また、フシを付けて謡う部分には、一つ一つの音を力強く表現する「ツヨ吟（ぎん）」と旋律的で繊細な表現をする「ヨワ吟」があります。
 ≪ここに注目≫コトバ、ツヨ吟、ヨワ吟による表現を聴き比べて、それぞれの謡い方の特徴を感じ取ろう。

ポイント2 舞の音楽 ≪ここに注目≫楽器の音色や速度の変化などに気を付けて、囃子（笛、小鼓、大鼓）によって演奏される舞の音楽を聴こう。

ポイント3 謡による表現の工夫 左に示した詞章（※）は、敦盛が戦いのありさまを再現する場面の一部です。平家一門の乗った船に乗り遅れまいと水際に駆け付けたものの、船ははるか沖行ってしまう、途方にくれる敦盛の様子を描写しています。地謡がツヨ吟による謡で、力強くドラマティックに表現します。

※【詞章】（縦書き）一門みなみな船に浮かめば乗り遅れじと、汀（みぎわ）にうち寄れば、御座船（ござぶね）も兵船（ひょうせん）も遥かに延びたまう。

≪ここに注目≫速度やリズムの変化に注目して、場面の様子が謡でどのように表現されているかを味わおう。

謡「敦盛」から

◎模範演奏を聴いたりまねたりしながら声の音色や速度やリズムの変化などを感じ取り、表現を工夫して謡いましょう。

※次頁に「（シテ）さるほどに御船を始めて （地）一門～延びたまふ」部分の謡本を掲載

謡に関する言葉

【生字（産み字）】「いーちーもーんー」のように一音ずつ意識して謡う場合や、「のびたーア」のように音を長くのばしたりその高さを変化させたりして謡う場合の、母音のこと。

【コミ】謡や囃子を演奏するときに大切にする間のこと。コミの取り方で速度や強弱などが決まるとても重要なもので、声には出さずに「ツ」や「ン」とコミを取る。

教育芸術社「中学生の音楽 2・3 下」(p. 44～49) より抜粋して引用

②教育出版社「中学音楽 2・3 上」能「羽衣」のキリから（大ノリ）

能の音楽を体験しよう 能の謡では、微妙な音の高さの変化が固有の味わいを生み出します。模範演奏を聴いて、まねをしてみよう。日本的な音の動きや間を感じながら、打楽器のリズムを手や身近な楽器で打ってみよう。

謡の音 シテ（主人公）やワキ（相手役）は一人でうたい、地謡は大勢で同じ旋律を斉唱します。また、謡は決められた高さではなく、うたう人の音域に合わせてうたいますが、上音、中音、下音という三つの音を基本にしています。

謡のリズム 七五調の歌詞を八つの拍にあてはめてうたう、「平ノリ」というリズムが基本で、他に「大ノリ」や「中ノリ」というリズムもあります。

教育出版社「中学音楽 2・3 上」(p. 62～63) より抜粋して引用

以上が2社の謡及び囃子に関する文章記載及び旋律・囃子譜等である。従前の中学校音楽教科書と比較すると、謡に関する記述や囃子譜が増えており、謡の実技や口唱歌や打楽器、タブレット端末等での囃子の演奏を通して旋律やリズムの特徴を感受し、鑑賞と結びつけて能の学習を深められる内容となっている。

4 当センター講座での実践

(1) 中高音楽「能の節を謡ってみよう＆タブレットでお囃子を創ろう」の講座概要

①日時：令和5年8月17日（木）13時30分～17時00分

②会場：京都府総合教育センター北部研修所 音楽実習室

③講座のねらい：能『敦盛』と『羽衣』の謡の実技とタブレット端末での囃子創作を通して能楽の理解を深め、能の学習を通して育む資質・能力を考える。

④講師：能楽師 水上優氏（東京藝術大学音楽学部邦楽科准教授）

⑤受講者：20名（小学校1名、中学校15名、高等学校4名）

(2) 研修内容

①講義・実習Ⅰ「能『敦盛』と『羽衣』を謡ってみよう」

能「敦盛」の「一門皆々」から終末部まで、「羽衣」のキリ部分について謡本に沿って、旋律の上下やクリ、ウキなど細かな謡い方の指導を受け、講師の謡の抑揚や間などに習って、受講者が謡を謡った。

②実習Ⅱ「タブレットで能のお囃子を創ろう」

受講者が「敦盛」と「羽衣」のいずれかを選び、タブレット端末の音楽創作アプリケーションGarageBandを活用してリズム音源を入力・編集し、囃子を創作した。「羽衣」は教科書の囃子譜を基にして大鼓、小鼓、太鼓及び掛け声を入力したが、「敦盛」は謡部分の囃子譜は教科書に記載がないので、小鼓、大鼓、掛け声のパート譜を筆者が作成した。なお、「敦盛」の囃子は、もともと太鼓パートがない。

※筆者作成 能「敦盛」の囃子打ち込み用パート譜「一門皆々～水際にうちよれば」

	(8)	1	2	3	4	5	6	7	8	1
謡		(ツ)	い -	ち -	も -	ん -	み -	な -	み -	な -
大鼓		(ツ)ヤ △ハン	×	×	△	△	×	△	×	△
小鼓		(ツ)ヤ	○	△	×	○	○	(ツ)	○	(ツ)

		2	3	4	5	6	7	8	1
謡		(ン) ふ	- -	ね -	に -	う -	か -	め -	ば -
大鼓		×	×	×	×	×	×	×	△
小鼓		○	○	×	○	○	○	×	(ツ)

		2	3	4	5	6	7	8	1
謡		の オ	リ イ	お -	く -	れ -	じ -	と -	- -
大鼓		×	▲	▲	▲	△	×	▲	▲
小鼓		○	○	(ツ)	○	○	○	×	○

		2	3	4	5	6	7	8	1
謡		み -	ぎ -	わ -	に -	(ン)う	- ち	よ れ	ば -
大鼓		▲	△	×	▲	×	△	×	△
小鼓		○	○	(ツ)	(ツ)	△	×	△	(ツ)

※掛け声：記号 ヤ（発音ヨ）ハ（発音ホ）ハン（発音ホン）イヤ（発音イヤー）
（ツ）（ン） コミ

※大鼓の唱歌：頭（かしら）△チョン（強く響かせる） 甲▲ツ（柔らかく響かせる）

※小鼓の唱歌：甲（弱高） ●チ
頭（強高） △タ
程（弱減入） ●フ
乙（強低） ○ボ

③実習Ⅲ 連吟の楽しみを感受しよう

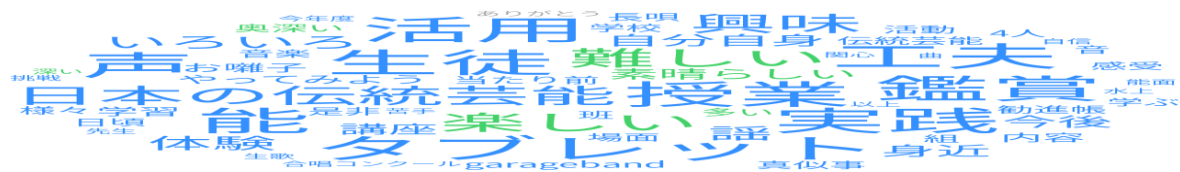
グループごとに「敦盛」「羽衣」のいずれかを選び、タブレットの囃子音源を伴奏としてグループで連吟を発表し、講師から講評を受けた。

(3) 受講報告書及びアンケート分析

①受講報告書（20名：小学校1名、中学校15名、高等学校4名）

ア 活用意欲に関するリード文：本講座内容のうち、今後の教育実践に役立てたり、勤務校で広めたりしようと思うことを記入してください。

イ 受講報告書のテキストマイニング



マイニングソフト (UserLocal AIテキストマイニング) で作成

ウ 出現内訳

⑦タブレット、iPadに関する記述 8件

- ・タブレットと日本の伝統芸能を共に授業内で取り扱う
- ・タブレットを様々な形で活用してみたい
- ・タブレットを使った授業が当たり前の学校
- ・タブレットで音を重ねて伴奏のようにして発表する
- ・タブレットで今日やったことをやってみたい
- ・タブレットは授業の中で使う場面も増えてきた
- ・日本の伝統音楽を扱う学習でタブレットを使って身近に音や音楽を感じられる
- ・iPadの活用の幅を広げる

④工夫に関する記述 5件

- ・ 感受していけるよう工夫したい
- ・ 授業を工夫してつくっていききたい
- ・ 節回し等を工夫すると能らしく聞こえてきた
- ・ 能の謡や囃子を身近に感じて、親しむための工夫を学ぶ
- ・ 知覚したことを深める工夫を考えたい

⑦日本の伝統芸能に関する記述 4件

- ・日本の伝統芸能の奥深さや素晴らしさを感じることができる
- ・タブレットと日本の伝統芸能を共に授業内で取り扱う
- ・生徒たちが興味をもって日本の伝統芸能に触れ、感受していける
- ・日本の伝統芸能である能をどのように授業に取り入れていくか

①鑑賞に関する記述 4件

- ・能の内容や鑑賞を学習するだけでなく、謡を体験することは、能についてより深く親しむことができると思った
- ・授業でも鑑賞したり、歴史を学ぶだけでなく、実技も取り入れていきたい
- ・鑑賞だけではなくて、実際に謡うこと、創ることを授業の中に取り入れていきたい
- ・能のセリフやストーリーに興味を持てるようになり、より良い鑑賞にもつながる

④GarageBand及びガレージバンドに関する記述 3件

- ・ GarageBandを有効に活用できる
- ・ GarageBandなど音楽活動、表現の場ではなかなかうまく活用できていない
- ・ 講義Ⅱで習ったガレッジバンドを使用してみよう

④活用に関する記述 3件

- ・タブレットを様々な形で活用してみたい
- ・GarageBandを有効に活用できる
- ・GarageBandなど音楽活動、表現の場ではなかなかうまく活用できていない

⑦伝統音楽に関する記述 2件

- ・創る段階から楽しかったので、伝統音楽を少しでも身近に感じられるようにしたい
- ・日本の伝統音楽を扱う学習でタブレットを使って、身近に音や音楽を感じられる

② Formsアンケート(回答16名)

ア アンケート質問項目

- (1) ご勤務されている校種を以下の選択肢より選んでください。A 小学校 B 中学校 C 高等学校)
- 2 本日の謡の実技で一番おもしろいと感じた部分を簡潔にご記入ください。
- 3 今後、音楽の授業で能楽を扱う場合、本日の講座のどの部分を活用できますか。
具体的にご記入ください。
- 4 その他 本講座に対して、ご意見等ありましたらご記入ください。

イ アンケート回答結果（16名回収/受講者20名）

- 勤務校種：小学校 1 名、中学校12名、高等学校 3 名
○受講報告書と同ソフトによるアンケート設問 2～4 のテキストマイニング



ウ アンケート設問の出現内訳

設問 2 : 謡の実技で一番おもしろいと感じた部分 (複数回答)

⑦流派の違い、流派の特徴等 4 件

- ・宝生流の語り方の特徴
- ・流派によって、音の高さなどが違うこと
- ・宝生流の優雅さを知ることができたこと
- ・流派の違いを感じたこと

①謡の旋律の抑揚 4件

- ・謡いの抑揚 ・音程の上がり下がり ・謡の旋律 ・謡の音程

⑦タブレット（ガレージバンド）による創作 4 件

- ・ Garage Bandを活用した音(リズム)の重なり
- ・ タブレットを活用した活動
- ・ タブレットでお囃子をつくったこと
- ・ 創作

⑤謡のリズム 3件

- ・ 謡のリズム
- ・ Garage Bandを活用した音(リズム)の重なり

㊦ ツヨ吟とヨワ吟 3件

- ・ ツヨ吟とヨワ吟の違いの謡い分け
- ・ 謡については、授業で何度も実践していますが、ツヨ吟やヨワ吟などDVDなどではあまり分かりにくいニュアンスなど、講師の先生のご指導のもと実習できて楽しかったです
- ・ ツヨ吟ヨワ吟などの特徴

㊧ グループ連吟の発表 2件

- ・ グループの創作の発表
- ・ 連吟の発表

設問3：今後、音楽の授業で能楽を扱う場合、本日の講座のどの部分を活用できますか。

㊨ タブレット（ガレージバンド）の創作 10件

- ・ タブレットを用いての創作
- ・ タブレットの活用と共有
- ・ ガレージバンドの活用と表現（謡）
- ・ ガレージバンドを使いながら、謡も入れて発表してみたい
- ・ タブレットを活用した活動
- ・ お囃子は口で歌ったり手足でリズムをとるなどが生徒たちとのグループ学習でしたが、本日のタブレットを使った実習は、生徒たちの伝統芸能への興味の第一歩として活用してみたい。創作も含めて様々な題材にも工夫して取り入れたい
- ・ 謡を何度も練習して、タブレットでお囃子を作り、お囃子に謡をみんなで歌う
- ・ iPadの活用
- ・ ガレージバンドでお囃子を作ってみる部分
- ・ お囃子を創作する

㊩ 謡 9件

- ・ ガレージバンドの活用と表現（謡）
- ・ ガレージバンドを使いながら、謡も入れて発表してみたい
- ・ 謡い
- ・ 間違っても大きな声で謡うこと
- ・ ごまぶし
- ・ くりぶし、謡に親しむ
- ・ 謡を何度も練習して、タブレットでお囃子を作り、お囃子に謡をみんなで歌う
- ・ 「敦盛」を謡ってみよう
- ・ 歌唱の実践
- ・ みんなで一緒に謡う

設問4：その他 本講座に対してご意見等ありましたらご記入ください。（9件）

＜特徴的な意見＞

- ・ 講師の先生の発声がとても良かったです。声楽出身の私がいうのとな

んですがとても響いていたことに驚きました。やはり生の声は最高です

- ・能楽を通して、様々なことを考えることが出来ました。もう2学期が目の前で、出来ればここから今日の講座の内容を噛み砕き、授業に活かしていける様にワークシートなども工夫したいのですが、（中略）出来れば夏休みの前半に講座があれば嬉しいです

③ 受講報告書及びアンケートの考察

ア 受講報告書から

テキストデータとしては、タブレットやiPadを用いた囃子創作に関する言葉が多かった。タブレット端末で囃子音楽を作成することが伝統音楽への興味のきっかけとなり授業への活用意欲につながったと考えられる。またタブレットに関する言葉が上位に出現しながら、多くの受講者は謡の体験によって実感を伴って謡の旋律や囃子のリズムの特徴を理解し、我が国の伝統音楽の奥深さを感じていただけたのではないかと考える。

イ アンケート集計結果から

授業への活用については受講報告書と同様にタブレット端末による囃子創作に関する言語が上位であった。伝統音楽とICT活用は一見、相反するように思えるが、リズムや旋律等の「音楽を形づくっている要素」として授業で取り扱う視点は現代の音楽と共通である。音楽創作アプリケーションによって和楽器の音色を選択して旋律やリズムを入力して音源編集したり、また創作した音楽をリコーダーや打楽器等で実際に演奏したりするなど、伝統音楽の授業でもICT活用できる場面は多く、受講者の興味が高いと考える。

謡の流派について、昨年度講座では観世流の能楽師を講師としたので、今年度は異なる流派の宝生流の能楽師を講師として実施した結果、同じ詞章であっても宝生流の方が旋律の抑揚が大きいことが理解され、流派による謡い方の違いへの気づきの記述が多く見られた。また、受講者自身が大きな声で連吟する楽しさを体感できたことへの記入も多く見られた。一般的に小学校から高等学校までの音楽の授業でクラス全体での歌唱活動は西洋のハーモニーを基本とする合唱がほとんどであり、謡の連吟は部活動等を除いてあまり例がないと考える。本講座によって謡の連吟の魅力を発見した受講者が謡を教材化し、授業実践することによって、生徒が伝統的な発声に興味をもち、我が国の伝統音楽を尊重する資質・能力につながることを期待している。

④ 本講座の成果と課題

ア 成果

本年度の当センター2年目教員ステップアップ3講座（北部）で中学校音楽の2年目教員が、本講座を受講した後に2学期の音楽科授業で能「敦盛」の謡の実技に取り組んだ成果を発表した。個人テーマを「効果的な歌唱指導の工夫」として、合唱だけでなく能の謡に取り組むことにより、生徒が声を出す活動に主体的に取り組み、能を鑑賞で終わらず謡の表現と関連させることで、能の理解が深まり、興味・関心が深まったという実践報告がなされた。

イ 課題及び次年度講座に向けた改善案

- ① 2つの教科書が共に観世流の旋律及び囃子譜で記載されているので、宝生流の詞章を含めて教科書の記載と異なる部分があった。次年度講座でも教科書の旋律譜に基づいて、囃子音源のタブレット端末への入力実技を実施するため、観世流講師を招聘することとする。
- ② 令和4年度及び5年度に実施した能の実技講座の講師は共に男性の能楽師を招聘した。しかし、受講者の多くが女性教員のため、絶対音がない謡において講師の男性の声域では謡にくいと感じた受講者があったので、次年度講座は女性の能楽師を招聘することとする。
- ③ 音楽科授業への活用について、タブレット端末への打ち込みが上位であったが、本講座でのタブレット端末の打ち込みについて十分な時間を確保できていなかった。次年度講座では受講者のニーズも考えて打ち込み時間を確保したい。
- ④ 本年度、囃子の創作アプリケーションとしてGarageBandを用いたが、和楽器の中に大鼓と小鼓の音源がないので、長胴太鼓や締太鼓、鉦等の音源から近い音色を選んでリズム入力を行った。大鼓及び小鼓の音源については、録音して音源を作成するか、似た音源を和楽器からさらに探すか、あるいは音源入力及び編集できる他の音楽創作アプリケーションについても研究する必要がある。次年度講座ではGarageBandを使用しながら、他のアプリケーションも紹介することとする。
GarageBandは管楽器、弦楽器、打楽器、電子楽器等多くの音源を有するが、音源入力時は拍の音楽となる。我が国の伝統音楽での活用を考える時、産み字や間、雅楽の重なりの音楽のように西洋の拍子や機能と声にはない特徴があるので、授業のねらいによっては、活用するアプリケーションの選定が必要と考える。

5 音楽科の思考力・判断力・表現力等を深めるパフォーマンス課題の充実のために

(1) 小学校音楽科で身に付ける資質・能力の考察

① 歌唱共通教材の感受

小学校の歌唱共通教材は「ひらいたひらいた」「うさぎ」「越天楽今様」のように我が国の自然や文化、伝統的な習慣を歌ったものが多く、歌詞の抑揚やリズムが音楽の旋律やリズムに生かされている歌が多い。それらの歌詞に親しみ、イメージを表すための歌唱表現を考えることが伝統音楽の理解につながる。

なお、筆者は昨年度から当センターの動画コンテンツとして「思考・判断して表現する小学校音楽」Vol.1「ひらいたひらいた」Vol.2「かくれんぼ」Vol.3「うさぎ」を作成し、伝統音楽の理解につながる資質・能力をはぐくむ指導事例を示した。

② 産み字（母音ののびし）や節回しなど伝統的な歌唱の特徴の気づき

教科書に記載されている能「敦盛」の地謡の「のびたまふ」の部分に見られる母音の延ばしは、長唄や義太夫節、日本民謡等の我が国の伝統的な歌唱の特徴である。小学校音楽科の教科書には、「ソーラン節」のような有拍の八木節様式と「刈り干し切り歌」のような追分様式の特徴を比較する題材がある。また、謡や長唄等の節回しや民謡のこぶしも伝統的な歌唱の特徴であり、母音の響きを生かした音楽表現でもある。このように母音を大切に我が国の言語文化に親しみを持つことが我

が国の伝統音楽の理解につながると考える。

③謡の拍子と歌唱教材との関連

謡の拍子は拍子合及び拍子不合の2種類があり、拍子合の平ノリは七五調十二文字の詞章である。「夕やけ小やけ」（ゆうやけこやけで ひがくれて）や「うみ」（うみはひろいな/おおきいな）などの歌唱教材は七五調の歌詞が多く、意識せず自然に歌っている場合が多い。「荒城の月」や「越天楽今様」のリズムは一拍に一音が入る大ノリのリズムであり、謡のように朗々と発声すると歌いやすい。このように七五調のリズムに親しむことも伝統音楽の理解につながると考える。

④口唱歌

囃子は能楽囃子の他に祭囃子や長唄の囃子など多くの種類があり、打楽器等や弦楽器等の各楽器の奏法は口唱歌によって伝承されてきた。教育芸術社の小学校音楽科第3学年の教科書には神田囃子の締め太鼓の楽譜として口唱歌「天テテツクツク天スケ天ヤ」が縦譜で記載され「しめだいこのリズムを唱歌（口唱歌）で歌ったり、打ったりしましょう。」と脚注に示されている。和楽器の習得に口唱歌が大切にされてきた我が国の音楽文化に愛着をもって口唱歌に親しむことが大切と考える。

(2) 幼小中高をつなぐカリキュラム・マネジメント

中学校や高等学校の音楽科授業での我が国の伝統音楽の学習において、幼稚園から高等学校芸術科までをつなぐカリキュラム・マネジメントが必要と考える。次年度講座においても、幼稚園から高校までつなぐ資質・能力として提示していきたい。

6 まとめ

今回、ねらいを「能『敦盛』と『羽衣』の謡の実技とタブレット端末での囃子創作を通して能楽の理解を深め、能の学習を通して育む資質・能力を考える。」と設定して講座を実施した。

前半のねらい「能楽の理解を深める」については、受講報告書等からほぼ達成されたと考えられる。

後半のねらい「能の学習を通して育む資質・能力を考える」の資質・能力を、冒頭に示した「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに（芸術科音楽：幅広く・深く）関わる資質・能力」とすると、受講報告書の「能の内容や鑑賞を学習するだけでなく、謡を体験することは、能についてより深く親しむことができると思った。」「授業でも鑑賞したり、歴史を学ぶだけでなく、実技も取り入れていきたい」「鑑賞だけではなく、実際に謡うこと、創ることを授業の中に取り入れていきたい」の記述に見られるように、謡や囃子の創作実技によって能がより身近なものとなり、能を授業で取り扱うことが難解なイメージから楽しいイメージに変化することが考えられる。

このように、教師が能動的に能の授業を構想し、授業実践することで、伝統音楽を継承、発展、創造する資質・能力が育まれると考えられる。

次年度は、謡の旋律やリズムを知覚・感受するのみでなく、歌舞伎や義太夫節など他の伝統音楽との比較・関連、民謡や相撲の呼び出しなど現代メディアから身近に聴くことのできる伝統的な歌唱等との関連等を考え、能が社会に果たした役割、現代まで継承

されている意義を考える題材の構成を受講者が協働的に話し合って考えられるよう、次年度音楽講座「中高音楽実技『能楽の連吟を楽しもう・お囃子を創ろう』」において、謡の実技とタブレット端末での囃子創作の他に、上記の内容を考える授業デザインの構想演習を含めて企画したい。

<参考文献>

- ・教育芸術社(2017)「中学校学習指導要領解説音楽編」(文部科学省)
- ・教育図書(2018)「高等学校学習指導要領解説芸術(音楽美術工芸書道)編 音楽編 美術(文部科学省)
- ・音楽之友社(1980)「邦楽百科事典」(吉川英史、金田一春彦、小泉文夫、横道萬里雄他)
- ・音楽之友社出版(1990)「能の囃子事 東洋音楽学会編」(横道萬里雄、蒲生郷昭他)
- ・教育芸術社(2021)「中学生の音楽2・3下」(石上則子、斎藤忠彦他)
- ・教育出版(2021)「中学音楽 2・3上」(伊野義博、井上洋一他)